教育懇談会

同志社教育をどう考えるか

山下美保　木村博一
二宮淑美　荘厳舜哉

同志社では昭和四十一年四月から教育懇談会を定期的に開いている。これは住谷総長の発案になるもので、学園のかかえている諸問題、あるいは教育問題一般について、全学園の教職員が自由に意見を出しあい、話しあうことを趣旨としている。教育懇談会の最近のテーマをあげると、「同志社教育はこれでよいのか」「同志社教育はどうあるべきか」「同志社教育のヴィジョン」等であり、出席者から忌たんのない意見が出されてきた。

ところで去る十一月十八日に開かれた懇談会は、従来と異なり、在学中の学生に「同志社教育をどう考えるか」について意見をきいた。発言者は四名であるが、木村君と二宮さんは同志社の中・高校から進学してきた、いわゆる一貫教育を受けてきた学生、荘厳君と山下さんは一般の高校よりの進学者である。ここでは誌面の関係で、四名の発言要旨のみを掲載したが、懇談会では発言後、住谷総長、秦理事長および出席した約三十名の教職員と長時間にわたり意見の交換が行なわれた。

——編集部——

教育不在の講義

山下美保
〈大学文学部二年〉

同志社教育といわれてもピンとこないというのが、わたしの正直な感想である。それはどうしてかなと考えると、同志社の教育というものが、現在のわたしの意識の中には存在しないからであろうと思う。同志社という組織があまりにも大きくなりすぎて、明確に同志社というものを把握できないということ—素朴なことからいうと同志社というのは赤レンガの建物と四条通りとそうかわらないごったがえしたキャンパス、そういうことでしか同志社を把握することができない。自分の大学がわたしの意識のなかに存在しないというのはやはりさびしい。教育というのは、わたしは人間形成のための実践を行なうことと

考えているが、今の同志社教育はどうかというと、わたしの受けている講義は、おせじにも教育とはいえない、おそまつなものがあまりにも多い。それはやはりマスプロに起因する問題だと思うが、しかし大学が現在のように大衆化し、多量の学生をかかえている現状では、すぐにマスプロをやめるということはできない。ここで妥協するのは残念だけれども、マスプロという現状認識にたって、その現状をいかによりよくしていくかというところから出発しなければならないと思う。

それを単的にいえば授業の内容をもっと充実してもらいたいということ、設備をもっと充分なものにしてもらいたいということになる。大学というのは、自ら目標をきめて自主的に学ぶところだとか、真理探求の場であるとかいろいろいわれるが、これはあくまで理想であって同志社の現状とくらべてみたらあまりにも差がありすぎると思う。自らが目標をきめて自主的に……ということをわたし自身を例にとって考えてみたら、入学したころはいろんなことをやりたいという意欲ももっていたが、しかし一年半たった今、その情熱はほとんどなくなっているのではないかと思う。積極的にいろんなことを吸収したいとか、やってみたいとかいう気持がどうしてなくなってきたのか、それはさきにふれた魅力のない講義、不完全な設備にある程度関連があると思う。

まず授業は先生がノートをよみあげてそれをノートに書き写すだけという場合が多く、講義に迫力がなくて漫談でしかない授業……そんなものから一体なにが得られるかと考えてしまう。人間形成などはおろか、そこには単なる知識の切り売りさえもないのである。むしろ高校の時の方が充実した内容があったのではないかと思う。そこには受験の弊害があるが、高校までの知識のつめこみ教育さえも今の同志社大学においては期待できないのではないか。全く悲劇的だとさえ思う。さらに切り売りされた知識をどのように自分の中で統一していくかということ、そのことについては、大学は完全にノータッチである。これは当然自分で考えるべき問題ではあるが、もうちょっとなんとかしてほしいという期待がある。今の同志社では、すべての問題がマスプロだから仕方がないんだということになっている。しかし本当にそういうことですませてしまっていいのかどうか。単なる知識の切り売りだけでなく、何か与えてくれて、そして現代に生きているわたしたちとどこかでつながっている——そんな魅力のある講義であれば、いくら人数が多くてもいいと思うし、そういう講義であれば積極的にでたいと思う。だから第一に授業をもっと充実してほしいと考える。わたしは今講読をとっているが、休講ばかりで前期、後期を通してたった五、六回しか授業がない。これはいくらなんでもひどい。これではやる気をもっていてもその気がなくなったり、不満のでてくるのも当然だと思うが、それよりもたった五、六回の講義をそのまま大学が認めて放ってあるということ——そこにこそ問題があると思う。

また教室においてさえ、先生と学生の対話がほとんどない。対話がないというのは共通の基盤がないということであり、どうして共通の基盤がないかというと、それは学生側の勉強不足ということもあると思う。しかしわたしたちは今まで中学、高校の教育において教室における対話の訓練をうけてこなかったということもある。しかしこんなことも、大学の講義がもっと魅力あるものであれば、う

ちやぶれるものではないかと思う。そしてそういう講義に対する注文を、われわれ学生はどこへもっていったらいいのか、それすらわからない。現状ではつまらないとか仕方がないとかいって、あきらめるよりほかないのである。学生と大学が完全に断絶していて、ぜんぜんそこにはつながりがない。現在の状態であれば、わたしは大学の講義に何も期待できないし、何を得たいとも思わない。

そうなると自分でやるより仕方がない。そこでわたしは万葉集の研究会に入っている。そこには何か充実感がある。同志社の学生ということと研究会の会員ということが、本来ならば重なり合わなければならないが、わたしの場合はそれは全く別べつのものになっている。そして極端にいえば研究会のためなら、授業をさぼってもいいということになる。むしろそのことの方が当然のことのようになっている。学生生活のすべてが研究会での生活であるという非常にかたわな学生生活が一般的にもあるのではないか。しかしなお同志社の学生でなければならないということは、何かさびしいし、わたし自身のなかで二つのことがつながらない。

入学したころのわたしが大学に対してもっていた期待は、かならずしも講義に対してではなく、学べる場を与えてほしいということでもあった。しかし、その場がまた非常に不完全である。それは設備の問題にもなるが、たとえば図書館が完全でないということは大学にとって致命的だと思う。図書の数がすくない。あったとしても一冊しかないから始終貸出中で、実際にみられるのに二週間ほどかかるということが多い。また図書室もせまく、すわれないということもしばしばである。ここでまたやろうという気持がくじかれてしまう。

以上のように授業にも期待できないし、自分でやろうと思っても場所もないし、図書もない。そのなかでささやかながら研究会にしがみついて、なんとかやっているのが現状である。だから大学はもっと設備をよくしてほしい。マスプロなんだからということで、すべてをそのせいにしようとする姿勢をもう一度考えなおしてほしい。ある国立大学の友人からきいたところでは、その大学では何か問題があると、すぐ対策委員会みたいなものがつくられ、そこで教授と学生のはなしあいが行なわれる。学生運動についても、それぞれの時点でたえずクラス討議が行なわれるという——そういう状勢に対する機敏な対応が、今の同志社には全くない。同志社の場合、先生もマスプロだから仕方がないんだということであきらめてしまっているようにみえる。

一貫教育の必要性

木村博一
〈大学法学部三年〉

今日のテーマは同志社教育をいかに考えるかということであるが、わたしはその中でとくに同志社教育における一貫教育の必要性、あるいはその学園内部における今日的意義について考えてみたいと思う。というのはわたし自身、中学から大学まで同志社に足かけ九

年間籍をいている。その間に感得してきたことをこの機会に発表したいと考える。わたし自身一貫教育をうけたものの一般的な見解をのべるつもりでいるが、力不足あるいは浅学のため理解をあやまっている点も多々あるかと思うが、その点はご出席の方々からご指摘していただきたいと思う。

まず今日一貫教育というのは、たがいに関連する二つの意味をふくんでいると思う。それは精神教育における側面と教課課程における側面に大別できる。わたしがここで問題にしたいのは主に精神教育における側面である。なぜなら教課課程における側面は同志社特有の問題ではなく、教育界一般の問題でもあり、またある程度技術的な操作で解決し得るものではないかと思うからである。

さて新島先生は大学設立の旨意のなかで大要つぎのようにのべている。

「大学設立は一国百年の大計である。そしてその目的はわが同胞の将来の安危禍福にかかわらず、国民教化にあり、二、三の英雄の力では維持し得ないものを維持するところの一国の良心たるべき人民、良心を手腕に運用する人々、良心の全身に充満した丈夫を養成する知的教育のみではなく、キリスト教をもってその徳育の基本となす精神教育が必要なのである。これは政府の手によって設立された大学では達し得ない。人民の手で設立した私立大学においてのみ達し得るものである。またそこにおいてこそ自己特有の気象を発揮し、自治・自立の人民が養成されるのである。」

以上のような新島先生の教育に対する考え方は、当時の官立大学の主知主義や福沢諭吉先生の設立された慶応義塾の総明英智主義に対するものである。すなわち前者はむろんのこと、後者はまた「学問のすすめ」の一節にある「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。唯学問を勤めて物事よく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。」という一節にあらわれているように功利主義的傾向にあるのに対し、新島先生は大学設立の旨意のなかでのべているとおり、当時の物質的、功利主義的傾向に抗して精神主義を標榜されたのだと思う。

ではそのような精神主義はいかに教化し得るか、単に技術を教え、知識をつけることならその基礎である学問をなし、それを終えたものすべてに対して効果があるだろう。しかしこと精神をふくむかぎり、いいかえれば全人教育に関するかぎり、それだけでは期待した効果はおさめ得ないと思われる。人間のその意志、人格が遺伝と環境によって制約される存在であるかぎりにおいて、全人教育の対象にのぼってくるのは早ければ早いほど、なければながいほどよいと考えられる。ここに同志社において、とくに一貫教育の必要性があると思う。わたしは大学における人間形成、人格陶冶の機能を否定するものではない。しかしながら一般的にいわれている人格形成期である中学、高校時代をとおしての一貫教育に比較する時、その効果については、ばく然としてではあるが疑問を感じる。卑近な例であるが、動物園のオリの中にいるライオンを考えてみよう、彼はオリのなかで自由に歩きまわる、すなわちオリの中という世界でしか意志決定の自由をもっていない。中学、高校時代はまさに一日一日、一本ずつオリがはめこまれていく過程であると思う。そしてそのたびに自由な意志の範囲がせばめられていく。そして大学に入ると、もはやその自由は委縮したかたちでしか存在しえないの

ではないか。わたしはここにおいて全人教育を目的とする同志社においてこそまさに一貫教育が必要だと思う。

では現状はどうだろうか。大学への学園内高校からの進学者は全学生の二〇パーセントにすぎない。もちろんこの現象は新島先生の広く国民を教化するとの思想のあらわれとも考えられる。またわたし自身、学内高校出身者が一貫教育制度を温室的、井の中の蛙大海を知らず的な欠かんをもつこともあるだろうと思う。しかし一般高校からの進学者とともにその欠点を補充し合い、よってともに同志社を形成発展させていくものであることを認めるのにやぶさかではない。問題は数ではなくて、一貫教育制の同志社のなかにおける位置づけではないかと思う。それはかかってわれわれ一貫教育生の態度にある。一貫教育生は同志社教育のしめくくりとして大学をみている。したがって大学を同志社教育の出発点とするであろう学園外高校出身者との調和にくるしむ。しかしそれはさきほどふれたことを意識しているかぎり時が解決してくれるものと思う。これはわたし自身の経験からもいえることである。ただその調和点がどのような方向性をもっているか、いいかえればそこにどのようなかたちで一貫教育の感化をおよぼしていくかということが、大学が同志社教育の終着点であるがゆえに、重要なのではないか。とくに大学において一貫教育についての批判がでている現在、その批判にこたえるために一貫教育生としては大学という場において一貫教育の感化をその目的に則するかたちで残すことが必要なのであり、そのためには一貫教育生全体がつぎのように考えることが必要だと思う。

すなわち機械文明による功利主義的主張が横行し、大学に対しインスタントに機械の部分品たる人間をつくりだすことを要求している現在の社会においてこそ、校祖新島先生が当時の実利主義に抗してうちたてられた精神主義の教育が輝く世の光明となり、そこにおいてさいわいにも新島精神に接する機会をながく与えられた一貫教育生はその恩恵を実践によって表明し、よって新しく新島精神に接するもののたすけとなる義務を負うものと考え自戒し、またそこに大学における自分の位置を見い出すことが必要だと思う。そしてそのことによってのみ大学において今日軽視されている一貫教育制度に対して同志社人の再考をうながすことができ、よってはじめに述べたように同志社教育に不可欠なその制度を維持していくことができるものと考える。そうでなく、もし現状のままであるとするならば、われわれ一貫教育生は他人からあなたの母校はときかれて、「同志社大学です」とこたえ、そのあといそいで「中学も高校も同志社です」とつけ加えようとする悲しむべきことがおこるであろう。今日、同志社をわれわれの母校とするために、われわれ一貫教育生は、一つの高くけわしい山を登るべく要求されていると考える。新島先生のいわれた「願わくば理論に愛の油をそそぐ」その先導者たらんがために。

以上一貫教育について述べたが、最後に一貫教育生というわたし自身の拘束をはなれて現代の大学教育のマスプロ化、とくにマスプロ講義についてわたし自身の見解を述べてみたい。現在のマスプロ化が本来真理の探求をその目的とする大学においてのぞましからぬ傾向であることは認める。ただ自分の不勉強をタナにあげていうようであるが、大学四年間で真理をきわめつくすということは、困難

な、或は不可能なことかも知れない。現在の大学において、わたしはその機能を、教養をつけること、真理への道の糸口を自らつかむことだと考えている。そうであれば大学の経営方針もさることながら、われわれ学生側においてマスプロ講義に対する態度を、自制する必要がある。わたしは大学にとって、学問研究することがその本分であるかぎりにおいて、講義の場はマスプロであろうとも、それは戦場であると思う。そこにおいては小クラスのような対話はない。そこでは教授の一方通行に終始する。さきほど戦場にたとえたがそのことは教師側と学生側がたがいにうちあうのではなく、教授が講義し、学生は守勢一方にたたざるを得ない。あるいはこれは本来の教育の姿ではないと思われる。しかしわたしはそこに一つの教育の姿があるのではないかと思う。なぜなら「攻撃は最大の防御である」ということわざの反対解釈でも明らかなことである。防御一方、守勢一方はもっとも維持するに困難な立場である。したがってマスプロ教育をうけたということが、自分において守りのカタをつくる——守りのカタなくしてわたしは攻撃はできないと考えるが——そういう守りのカタをつくるという一つの効果をうみだす。よってそれが大きな指針となってくるのではないかと思っている。マスプロ教育をやめ、大学の本来の姿にかえる、それがどのような姿であるかわたしは想像もできないが、しかしそういうふうに働きかける必要も認めている。そのような働きかけとともに与えられたマスプロ教育という現在の環境のなかで最大限自己陶冶、自己啓蒙を行なうこともまたわれわれの義務であり、そのためにはあるいは今述べたような意識をもつことも必要ではないかと考える。

〝過保護〟と主体制の確立

二宮淑美
〈女子大学家政学部四年〉

われわれが受けてきた教育と大学のあるべき姿、また女子大の問題点等について述べてみたい。われわれがうけた教育は「三つ子のたましい百まで」といわれるように、その家庭環境が非常に大きく影響していると思われる。わたしたちの生れた時期は、戦後の混乱期で、押つけの民主化が急に叫ばれたころである。だから親たちは自我のめざめもないままに、ただ無理解な親ではいけないということで、子供の主張や自由ばかりをみとめて、欲望を自制するということは教えなかった。そういう子供が大きくなって現代社会にでていく。そしてまた家庭では勉強、勉強といわれて、そういう人が大学へ入ってきて一体何をしていいのかわからんということになる。大学はマスプロ教育で対話がない。またすべてが点数制で能力は試験でためされる。そこでは自分で考えるという力を失ってしまって、問題提起、問題解決という秩序だった考えができなくなっている。そして産学一体の教育によって個性が喪失されている。そういう人間が社会にでると人間疎外におちいる。わたしは人間疎外を外的なものと内的なものにわけたいが、外的な人間疎外は経済構造か

らくるのであって、人間の労働が資本主義的社会の支配者によってさく取されていること、そして内的な人間疎外とは思想が混乱していて何にしたがったらいいのかわからないということに起因していると思う。

大学というところは勉強し、いいものはいいとし、わるいものはわるいとする社会改善の手だてとか方法を創造的に示すところだと思う。だからそこでは社会を改善していくという建設的な意見が述べられなければならない。その基盤になるのが人格である。しかし今の大学は人格形成の場になっていない。そうであれば同志社大学は一体どうしたらいいのかを考えたい。

同志社教育というのは、新島先生の新島精神によってつちかわれている。だから教育方針は当然新島精神というすばらしいものが根本にある。そしてそこにある思想は西欧のものと東洋のものが相まっているところに成り立っている。だからそこにはすばらしいものがあるのではないかとわたしは考えている。そして自然科学重視の産学一体の一般的傾向のなかで、同志社は、社会科学が非常に優秀なところだと思う。だから、われわれこそが、社会改善を地道にやっていかなければならないと思う。さきほど個性喪失といったけれども、同志社の一貫教育が個性を回復してくれるものとわたしは信じている。わたしは同志社十年生であるが、わたしの経験から考えても、同志社の一貫教育を受けてきた人には個性的な人が多いと思う。人間疎外にたちむかっていけるような人が多いと思う。だからわたしは一貫教育を肯定したい。

つぎに女子大学の問題について考えてみたい。女子大でわたしたちが満足しているかといえばノーとこたえなければならない。どういうことかといえば、女子学生は大学をでたら結婚するんだという意識が、学生にも先生にも強すぎる。しかし、花嫁学校化することには、みな反対だと思う。大学が真理探求の場であるにかかわらず、高校の授業の延長のような講義もある。そしてまた同志社女子大学の教育が、本当に正しければ、われわれはその教育をうけたものに教わるべきだと思うが、今の同志社では同志社出身の教員の育成ということはほとんどおこなわれていない。昨年大学院ができたが、これまでは新島精神をもった人に教わるということが、比較的すくなかった。これは悲しいことである。

またわたしたちは、過保護の状態にあることにも、不満がある。これは学生側の問題でもあるが、いま食堂のうどん値上げが問題になっているが、わたしは学生会は、うどんの値段なんか考えるべきでないと思う。それよりもっと教育にふれるような、真理探求の場にふさわしい問題をとりあげたらいいと思う。過保護に対する反駁が、そういううどん値上げ反対というかたちであらわれているのである。しかし学生運動にはほとんど無関心であるし、社会改善とか教育改善という問題についても実践がともなわない。学生の家庭はほとんどが中産階級であるから、親が学生運動に参加することをいやがるし、事なかれ主義にはしって何もしない。そして親のすすめる、できだけ条件のいい結婚をしてしまう。しかし真の幸福とは、そんな外面的なものではないと思う。真の幸福とは主体性なくして得られるものではない。その主体性を確立するのが本当の同志社教育であるべきだと思う。

社会体制と大学

荘厳舜哉
〈大学文学部三年〉

わたしは自分の話すことをまとめてきていないので、今まで三人の方が話されたことから、いろんなことを拾いながら自分の考えをのべてみたいと思う。わたしはやはり今問題になっている学生運動のことを考えてみたいと思うが、今までに三人がはなされたマスプロ反対とか、人間教育の問題も、結局学生運動にふくまれてくるのではないかと思う。たとえば東大の林文学部長が学生にカンズメにされて、そのなかでの学生とのやりとりが最近の「朝日ジャーナル」に掲っている。そのいちばん最後で、機動隊導入についてどう思うかという学生の質問に対して林教授は、「やむを得なかった」とのべている。たしかに大学の秩序という点から考えれば、やむを得ないかもしれないが、大学の自治、教授会の自治、あるいは学生の自治という点から考えれば、人間形成、学問の場に国家権力が介入してくるというのは、やはり少しおかしいのではないかと思う。何故にわれわれはそういう教育の場を求めなければならないかといえば、大学四年間、自分が勉強するにしろ、あるいは遊ぶにしろ、四年間、社会状況、人生、物事というものについて余裕をもって自分で考えられる場がほしいからである。そこでは人格形成ということもあるが、それは大学にきているからできるというものではない。そんな中で性急に学問をやろうとか、真理を探求するといってみてもそれはなかなかできるものではない。

さきほどから大学におけるさまざまの問題の改善ということがいわれているが、真に現在の社会ないしは教育を改善しようと思えば、改善というのはあくまで改善であって、根本的に変革するという一つのレボリューションがなければ、現在の状況はやはりいつまでもつづいていくと思う。そのなかでいくらわれわれが図書館を充実せよとかいっても、それはやはりあくまで改善にすぎないのであって、根本的に現実の大学の問題、社会の問題にメスをあてることにはならないのではないか。たしかに壁は新らしく　ぬりかえることはできるけれども、しかしそれはまたすぐよごれるのである。

また教師との対話の欠如ということがいわれるが、たしかにわれわれも教職員も理事者も、現在の状況というレベルでは、同じ状況にいるわけで、しかしそこにはやはり年代の差というものがあらわれている。結局われわれが、今までにどういう価値観の教育をうけてきたか、また自分がどういう価値観をもっているかということによって、同じ状況にありながら、自分の立っている状況がちがってくる。そこでやはり東大、日大、同志社でいろんな問題がおこっているのも、また対話がないというのも、そういうところに第一の原因があるのではないか。

わたしは、お年よりというか先輩の方々にいいたいのであるが、状況転向ということばが、安保以後につかわれはじめた。われわれ

は一つの状況に対して、むかしと同じ立場に立っていると思いながら、しかし自分が気づかないうちに状況の方がかわっていて、いつの間にか転向を余儀なくされている。自分が自分の思ったとおりに行動していても、後をふりかえってみると、状況はすっかりかわってしまっている。こういう非常にみじめな状況が現在あると思う。そういう状況をわれわれはどういうふうに認識するか、あるいはどう変革していくかという場合、これはつねにさまざまの価値観を一応検討してみるという態度が大学にいるものとして必要なのではないか。わたしは同志社の教職員がそういう態度をお持ちでないというのではないが、しかしやはり状況認識のずれがあると思う。そのずれが教育不在なり人間不在という疎外の問題にむすびついているのではないかと思う。われわれが状況を変革していこうと思えば、状況を先どりするということが一番必要になってくるわけである。現在学生運動をやっている諸君は、一つの経済体制なり社会体制なりをアウフヘーベンして、そこからそれを演えきして、そして新しい未来の状況認識を行なおうとしているのである。ところが現在の社会体制に埋没している場合には、そういった発想はでてこない。日大、あるいは東大の共闘会議の学生が、ジャーナリズムで批判されているが、わたしは彼らを批判することは決してあたっていないと思う。彼らは彼らなりに現代の状況をきりひらくために、どうしたらいいかということを真剣に考えているであろうし、もちろん受けとる側も考えていると思うが、やはり状況のずれがある。そこで暴力はいけないとか、大学教育をうけたもののやるべき行為ではないということでは非常に見方があまい。彼らの暴力は、今の社会の価値基準でいえばまちがっているかもしれないが、しかし多数者の法律によって悪と決められたことであっても少数者の正しいと思うことは、少数者の間では正しい、つまり民主主義の原則は、多数決にあるが、多数決というのは、少数意見を完全に無視する、また無視しなければ一つのルールはできない。それでは現在の社会の多数者とは一体何かということ、それはプチブルといわれる中産階級である。そしてプチブルをあやつっているブルジョワジー、さらに上に特権官僚、特権ブルジョワジーがいる。そういう人たちは自分の権利をまもるために現代の価値基準をまもっていこうとする。そういうなかで、それらの人々にさく取されているプロレタリアート——労働者は、そういう価値基準をまもっていくために自らの意見を犠牲にしなければならないというのはおかしい。だから現在の民主主義は完全無欠のものではない。あくまでわれわれが一個の人間としてある以上、われわれはやはり、意見を表明しなければならない。ところが、現代の大学ないし社会では、そういう少数意見はきわめて完全に無視されてしまう。こういうことをふくめて、大学教育は、そういう社会のなかでどういう役割を果しているかということをわれわれは考えなければならない。

大学というのは、やはりさきにもいったとおり、四年間に自分がどういう価値観をもって、社会、人間に対して自分の態度を決めるかということを考える場だと思う。そういう場において、やはり自分は一個の人間として、人格を形成していくというのは、あくまで自分の責任であるし、そこでマスプロ教育がわるいとか、ゼミナール制がいいとかいってみてもはじまらない。根本的に現在の大学

が、資本主義体制にある以上、現代の大学の姿は予想されたことであるし、そういうなかで新しい人間の全人格的な存在というものを求めるためには、やはり既成の価値観をゆりうごかすようなレボリューションが必要だと思う。そういうレボリューションは、日大にあったであろうし、カルチェ・ラタンの闘争にあったであろうし、あるいはスウェーデン、西ドイツ、イギリス等のスチューデント・パワーという若いエネルギーのなかにあったと思う。

どういう社会体制がいいのか、これはそれぞれ人によってちがうし、わたし自身もさまざまによっている。しかし、われわれが人間である以上、人間としてまっとうに生きられるというか、自分のもっている生きる権利が完全に主張できる社会が一番いいということはまちがいない。そういう社会は、どのような社会体制のなかに求められるか、それはまだわからないけれども、しかし、現代の大学そのものが矛盾した社会体制にある以上、大学問題を考えるということは、そのまま社会体制を考えるということになるのではないかと思う。

同志社においても、いずれ授業料値上げの問題がでてくると思うが、そういう場合に、何故に値上げをしなければならないか、そして何故に同志社大学は現在これほどまでに病んでいるのかということを、もう一度学生もふくめて教職員とともに考えなければならないと思う。

わたしは大学の四年間というのは、さきにもいったように、ものごとに対してどういうふうに考えるかということであると思うが、そのなかでいろんな授業があっても、それは決して無意味ではないと思う。したがって教育の場として、現代の大学が全くナンセンスだとは思っていない。しかし大学が、既成の体制の上にあぐらをかいて、ぜんぜん動こうとしなければ、やはりそれは教育の場として、あるいは人格形成の場として、非常にナンセンスなものになってくるのではないか。いつまでも大学が動こうとしなければ、学生としては、日大の学生がやったように、自主講座ないしはアメリカの大学でやっているティーチインというものを、学生の自主的な管理のもとにおこなおうとするであろう。そういう新しい教育というものを、大学側がいち早く感じとって、新しい時代に、新しい条件に対応できるような教育を考えてほしい。講義に出ずに講義がつまらないというのはけしからんといわれるが、それでは何故に、日大の学生が自分たちの自主講座とか、ティーチ

インに集まるかということ、そして既成のカリキュラムにおける講義にはほとんど耳をかさないのか、ということを考えてみなければならないと思う。やはり彼らなりに、現在、いちばん問題にしていることを、その講義のなかで考えることができれば、八千人、一万人の学生がおしかけるのである。だから、全学生が一番必要としているものを、講義のなかに反映させていく態度がどうしても必要だと思う。

さきほどから新島精神の問題がだされているが、わたしは新島先生というのは、非常にリベラリストでかつラディカリストであったと思う。新島先生の精神主義というのは、別に東洋のものでも西洋のものでもなく、人類全体の基本的にもっている自由に生きるという希求――それはサルトルでもサン＝テグジュペリでもカーマイケルでも、すべてがもっている自由への希求であったと思う。そういう希求が同志社大学をつくったのではないかと考える。だからわたしは、そういう新島精神を明確なかたちで、われわれ一人一人のなかに育てるということは、サン＝テグジュペリのいう「人間の土地に住む権利」をわれわれがどのように手に入れたがっているかという問題だと思う。かならずしも、同志社大学を卒業したから、新島精神をうけとっているかといえば、おそらく九九パーセントのものはそんなことは無関係であると思う。新島精神云々ということを、同志社の学内高校からあがってきた人、あるいはキリスト教関係の人は、よく口にするけれども、こういうことをいうのは非常に僭越であるが、彼らはどれほどまでに、新島先生が求めた自由を求めようとしているかということに、わたしにはやや疑問を感じる。確信がもてない。彼らのなかには、マージャン屋にいったり、恋愛にうつつをぬかしたり、サークル活動に埋没してしまっているものも多い。やはりせっかく一貫教育をうけてきた彼らに、そういう不満をいだかせるということは、現代の大学がのっかっている社会体制そのものに問題があるのではないかと思う。

さきほどからわたしは、改善でなく変革が必要だといってきたが、変革ののちにあるべき明確な未来像をもっているわけではない。しかし、それはやはり一種の社会主義体制であるが、ソヴェト等の官僚制機構の発達した社会主義体制ではなくて、要するに最終的にはマルクスのいう階級、国家の消滅したような社会を考えている。すなわち国家が消滅して完全に人間が自律できる社会――そういうものが最終的には理想だと思う。そしてローザ・ルクセンブルクがいったように、つねにラディカルにその内面において流動活動をおこし、そして既成の体制をうちやぶり、よりよい未来の体制を志向する――そういう運動がなければ、社会は固定してしまうだろうといっているが、まさにそういうものだとわたしは考えている。人間が人間として完全に解放される時代というのは、あるいは永遠にやってこないかも知れないが、つねに社会体制、時代状況のなかで、流動をおこしていく以外に、新しいものを形成する方法はないのではないかと思う。それは、われわれが、われわれの、あるいは大学の、そして社会のあるべき姿を求めて、考え、学び、実践することにほかならない。